

「新しい神話」における英雄の条件

—英雄的行為とその心的動機の解釈—

The qualities of a hero in “new myths”

—An interpretation of courageous acts and motives behind them—

植 朗子

Akiko UE

I はじめに

なにが物語の中で「英雄」を英雄たらしめるのか。たとえば、ドイツ語圏の民間伝承に、望まぬ婚姻を家臣から約束させられたエルス Els を救う騎士・ローエン格林 Lohengrin の英雄譚がのこされている。『ドイツ伝説集』¹に収録されているこの伝説、「ブラバントのローエン格林」*Lohengrin zu Brabant* (DS536)²は、かつては竜退治を成し遂げたほどの英雄であった家臣フリードリヒ・フォン・テラムント Friedrich von Telramund が慢心したことをエルスが嫌い、フリードリヒを倒すことのできる「新たな英雄」を求め探す場面から始まる。

そのような英雄 Held は見つからず、その公女（エルス）は必死に神に救いを求めた。すると、そこから遠く離れたモントザルヴァチュ Montsalvatsch にある聖杯城では、誰かが危急の助けを求めていることを知らせる大きな鐘の音が鳴り響いた。³

そして、神の使いである 1 羽の白鳥の導きによって、ローエン格林はエルスのもとへたどり着き、フリードリヒに勝利して、エルスを妻とする。この物語における主人公ロー

¹ Brüder Grimm: *Deutsche Sagen*. Nachdruck der 1. Auflage 1816 und 1818. Hrsg. von Heinz Rölleke. Frankfurt a.M. 1994.

² グリム兄弟の編纂した『ドイツ伝説集』には伝説集の番号が付されている。第 3 版以降の伝説番号がよく知られているが、第 3 版の伝説番号はグリム兄弟自身の編集ではないため、本論文では、ヤーコプ・グリムとヴィルヘルム・グリムによって収録された初版の番号を記す。慣例に従い、伝説番号は、書名の *Deutsche Sagen* から、DS を略記号として使用し、その後に通し番号を付けて表記する。

³ *Deutsche Sagen*: S.632.

エングリンが英雄であるための条件が、伝説の話中にいくつか示されている。

- ① 竜を退治できるほどの豪腕の騎士に打ち勝つことのできる特異な力を持っている。
- ② 高貴な者（聖杯王）の血筋であり、その血筋を秘密にしていること。
- ③ 知らせ（予兆、神の啓示）の鐘が鳴り、神の使いである白鳥に導かれていること。
- ④ 神を信じていること。
- ⑤ 神を信じる他の人物の危機を救うこと。

聖杯の城は、騎士・ローエングリンの父である聖杯王パルツィファルの所領である。この父子はドイツ語圏の神話的物語の中で、英雄として今日でもよく知られている登場人物である。

彼らはリヒャルト・ワーグナーの楽劇にも取り上げられ、その神話性・英雄性を題材とした作品が創作されている。パルツィファルをモデルとする登場人物は、ワーグナー作品では「パルジファル」という名に改変されているが、明らかにグリムの伝説集に収録されているパルツィファルの英雄的特徴が踏襲されている。ここで、『ワーグナー事典』⁴の解説を引用すると、彼は「『パルジファル』全幕に登場する愚者」であり、「おぼろげな記憶しか持たず、名前さえわからぬままに舞台に登場する彼は文字どおりのタブラ・ラーサ（白紙）である。このまっさらな少年に【共苦】という文字が書き込まれ、時間の経過とともに救い主としての全貌が、透かし絵のごとく紙背に浮かび上がる」⁵という。

そして、パルツィファルの子・ローエングリンは、ワーグナー作品において、エルス⁶との永遠の別離を悲しむ人間的⁷な感情の持ち主として描かれている。つまり、父（パルジファル）が「他者の苦しみ」を我が身に背負う、「キリスト的な愛」の持ち主であるのに対して、子（ローエングリン）は父よりも「人間的な愛」を内に秘める存在として語られているのだ。この英雄の「人間的」な感情とは、どのようなものなのか。

本来「英雄」というモチーフは、感情という点を含めても、その精神は神に限りなく近い存在であった。『ドイツ伝説集』の編纂者であるグリム兄弟 Brüder Grimm の兄・ヤコブ・グリム Jacob Grimm は『ドイツ神話（学）』 *Deutsche Mythologie* ⁸において、英雄 Held は「この世の出来事」に限りなく近づいた「神的存在」であり、神と人間の間にあるものとして論じられている。そして、「神々の光に満たされ」、「神々の恩恵を一身に受ける」この英雄という存在なしには、人間が現世の苦しみをなんとかやり過ごしていくことなどできない⁹、とした。また、英雄的精神 Heldentum は英雄のみに宿るもので、英雄が神々の栄光へとより近づくために、「悪しき者に立ち向かう不屈の行為」を達成するための原動力になっていると解説している。しかし、「神話」の 카테고리において、英雄の戦いの動機は悪を滅することであり、その背景にある人間的葛藤や恨みや復讐は、異なる次元のも

⁴ 三光長治・高辻知義・三宅幸夫監修『ワーグナー事典』東京書籍、2002年。

⁵ 三光前掲書、pp.284-285。

⁶ ワーグナー作品においては、妻の名前はエルザ。

⁷ 三光前掲書、p.394。

⁸ Jacob Grimm: *Deutsche Mythologie*. Wiesbaden. 2007, S. 275.

⁹ *Deutsche Mythologie*, S. 275.

のである。

「神話」のモチーフであった英雄は、時代の変遷とともに、「神」から「人間」的要素が少しずつ強まっていく。「神話」が「伝説」、「メルヒェン」そして、創作物語へと変化する中で、文章の装飾は次第に増え、英雄の心情や人間的な苦悩が描かれるようになった。この過程において、「英雄」像にはどのような変化が起こったのか。それは「英雄」が登場する作品のジャンルによって生まれる相違点も考慮する必要があるだろう。

それらの点を踏まえたとして、この世の災厄と戦い、人間や世界を救済する役割をおった「英雄」の精神性、彼らの戦いの動機は、後世の「英雄」の条件にどのような影響を与えたのだろうか。

II 「英雄」の定義とその話型

2.1 「単純昔話」における「英雄」

「英雄」というモチーフが生まれたのは、民間説話 (folktale) という文学ジャンルの中で、とくに神話 (myth) である。英雄譚 (hero tale) として、空想的産物としての英雄や、荒唐無稽な冒険譚、擬現実的世界の物語¹⁰が存在する。ドイツ語の伝説 Sage、メルヒェン Märchen にも英雄が登場するが、これは神話的要素を多分に含んだものである。19世紀の民間伝承研究者であるグリム兄弟は、『ドイツ伝説集』の序文において、伝説とメルヒェンが神話という同じ大地から生まれたものであるとし、伝説は「史的」、メルヒェンは「詩的」な要素が強い¹¹と論じた。また、ゲルマン神話 (北歐神話) の資料として、13世紀初めに『散文のエッダ』を著したアイスランドのスノリは、「神話の神々を遠い時代の英雄と解く」という傾向にあった¹²というが、伝説やメルヒェンにおけるモチーフとしての「英雄」に、神々との共通性を感じさせるものは多々見うけられる。

アメリカの民俗学者ステイス・トンプソン Stith Thompson は、民間説話における英雄譚や、それに類する単純昔話¹³において、様々な話型を紹介¹⁴している。

¹⁰ ステイス・トンプソン『民間説話—世界の昔話とその分類—』(荒木博之・石原綏代共訳) 八坂書房、2013年、pp.22-25。

トンプソンの「民話のタイプ・インデックス」は、フィンランドの民俗学者であるアンティ・アールネ Antti Aarne (1867-1925) が、「メルヒェン索引 Verzeichnis der Märchentypen」として発表したものに、改訂・補足するかたちで完成された。現在は、この2人によって作成されたものとして、「アールネ・トンプソンのタイプ・インデックス」という名称で知られており、現在も民話の話型分類の基準となっている。なお、本論において、原語を併記している箇所があるが、英語表記は () を付け、ドイツ語表記には () は付けずに記す。

¹¹ *Deutsche Sagen: S.12.*

¹² ヴィルヘルム・グレンベック『北歐神話と伝説』(山室静訳)、講談社学術文庫、2009年、P.471。山室による解説部分を引用。

¹³ 複数の話の筋が合わさった複雑な物語ではなく、伝説的な短いひとつの内容によって構成されている昔話のことを指す。

¹⁴ トンプソン前掲書、pp.239-240。

- a. 英雄や王の秘密が世に出ると不幸が起こる。(ロバの耳を持ったミダス王の例¹⁵)
- b. 人民の要望によって、再び帰還する英雄や偉人の話。(アーサー王の例¹⁶)
- c. 難題を克服する話。(ポリクラテスの指輪の例¹⁷)
- d. 偉大なる運命の予告。(モーゼの例¹⁸)
- e. 捨て子、あるいは自らの出自を知らない人物。(エディプス王の例¹⁹)

これを、前章でまとめたローエングリンの要素①～⑤に照らし合わせると、

- a. 血筋に関する秘密。(②に該当)
- b. 救いを求める人物の要望に応える。(⑤に該当)
- c. 特異な戦闘力。(①に該当)
- d. 神の意志を伝える鐘が鳴り、白鳥が導く。(③④に該当)
- e. ※該当なし

という結果になる。e.の条件については、ローエングリンでは該当しなかったが、その父パルジファルはまさに、その父を知らず、自分の名を知らぬ「純粹なる愚か者」であるため合致している。

では、パルジファル(パルツィファル)とローエングリンのいずれもが、ドイツ語圏を代表する「英雄」であるとして、この「捨て子、あるいは自らの出自を知らない」という条件の有無は、それぞれの英雄としての資質にどのような違いをもたらすのか。「英雄」の条件という前提を除外してみれば、単純昔話において、自らの出自すら知らない「愚か者」というモチーフには、特別な意味がある。彼らは「自分だけの精神世界に生きているので、品物や動物にも思い浮かぶままにいろいろな資質を賦与する」²⁰ことができる存在である。そして、「愚か者は融通がきかず、いわれた通りにしか行動しない」²¹という特性があり、ともすれば、これは失敗を引き起こすこともあるが、恐れを知らず、巨大な敵に立ち向かうことのできる強い精神の持ち主であるという側面を持っている。つまり、「愚か者」の精神には、「英雄」の心的特性と重なる部分がある。「無知」であることの精神的な強さが、人間の能力の壁を「英雄」に越えさせることができる要素となりうるのだ。

ここまでの民間伝説における「英雄」の条件を整理すると、以下のように仮定することができる。

¹⁵ トンプソン前掲書、p.241。ロバの耳を持っていることを穴に話してしまった王の伝承。結果として、世間の人々に知られてしまう不幸な内容。

¹⁶ トンプソン前掲書、pp.239-240。「王がいつか再び人民の要望に答えてこの世に戻ってくるといふ、偉人または神の再来の信仰は特別の宗教にのみ限らず、世界中に広く見いだされる。」と述べられている。

¹⁷ トンプソン前掲書、p.241。王が海中へ投げてしまった指輪が、料理で出された魚の腹から発見される伝承。

¹⁸ トンプソン前掲書、p.242。ベオウルフなどのように、将来偉大な人物になるという予言が他者によってなされる。

¹⁹ トンプソン前掲書、p.242。モーゼの例でもあるが、運命の予告によって、生みの親から養い親に預けられてしまう「捨て子」のモチーフ。

²⁰ トンプソン前掲書、p.178。

²¹ トンプソン前掲書、p.179。

- 条件 1：英雄とは、世界や人間に害悪をもたらす敵と戦う。
- 条件 2：英雄とは、人民の要望、個人の救済の願望に応えるために戦う。
- 条件 3：英雄とは、敵と戦う特殊な能力を持っている。
- 条件 4：英雄は、神、超自然的な援助者、超自然的な道具の力を借りることができる。
- 条件 5：英雄は、出自に関する特殊な条件、あるいは戦う運命を備えている。
- 条件 6：英雄には禁忌、秘密があり、周囲の者がそれを破った場合、英雄は現世から離れる。

英雄が悪と戦うには、「英雄とは、人民の要望、個人の救済の願望に応えるために戦う。」ことが発端となる。これをさらに分けると、前述の「捨て子、あるいは自らの出自を知らない」という条件の有無は、英雄の戦いの動機に大きく関わっている。

●出自を知らない「愚か者」の「英雄」

- ①人民に悪と戦うことを求められ、それに応えようとする。
- ②「純粋なる愚か者」は、戦うことを恐れず、戦いの相手が竜であろうと、悪魔であろうと、自らが傷つくこと、ひいては死ぬことを恐れないという意味で、「恐怖を超越した者」という特性がある。
- ③純粋であるがゆえに、神を疑わず、神と正義を求める人民の苦しみを自分の苦しみとして感じ取ることができる。

●高貴な血筋を自覚している「英雄」

- ①その血に課せられた役割ゆえに自然に敵と戦うことを選択する。
- ②自らの「英雄」としての血筋に確信があり、自らの能力を信じる強さを持っている。
- ③「純粋なる愚か者」でない「英雄」は、その動機となりうる深い思索や感情と隔てられたところにある、「戦う運命」に突き動かされていく。

よって、民間説話の単純昔話において「純粋なる愚か者」もそうでない英雄も、自らの感情や利己的な精神とはかけ離れたところで戦いに赴くと考えられる。「神話」や「単純昔話」に登場する英雄たちは、自分の身を犠牲にするかどうかという葛藤もないままに、その身を他者に捧げる。これは古代からの継承されている「英雄譚」の特徴のひとつであるといえよう。近代以前に成立した伝説やメルヒェンにおいては、まだ「英雄」の心理的描写は克明に記されていない。

2.2 「複合昔話」における「英雄」的行動を示す登場人物

児童文学者のリリアン・H.スミスは、児童文学の系譜として、「学問と文学とがおぼろな時の霧をはらって現われでてからも」²²、民間の昔話などの口承文芸が児童文学の原点にあることを指摘している。

²² リリアン・H.スミス『児童文学論』（石井桃子・瀬田貞二・渡辺茂男共訳）、岩波現代文庫、2016年、p.21.

英雄時代とは、その国の理想が偉大な英雄たちの性格と行動の上に形となってあらわれている時代である。これら英雄たちの偉業が、人びとの家の広間や炉辺で吟遊詩人によって歌われ、人びとの心に国の誇りをよびさまし、英雄たちを生んだその国民の伝統に、重みを与えたのである。²³

そして、アイスランドの英雄的サガの例を挙げ、「アイスランド人の人生に対する天性の傾向は、誇りと勇気をもってこれに当たることであり—最善を尽す人の誇りは、すべての人間がよく理解できるものであり、とくに勇気はよく理解できるのである。」として、子どもらが、素朴な英雄的物語を好むことを述べている。

また、単純昔話から発展した新しい物語としての「ファンタジー」では、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』を例にとっている。非合理的な夢の世界において、主人公のアリスが、色々な事件に巻き込まれる中で、勇気や忍耐や機転を試される。幾度となく危機からの脱出を試みるアリスの姿に向けられる読者の共感や感動が、「子どもたちの読書の喜びへとつながる」という。アリスは新しい「英雄」の姿であると思われる。

『不思議の国のアリス』において、夢の中で繰り広げられるナンセンスな事件は、アリスの命を奪う寸前まで彼女を追いつめるが、アリスは現実的な率直さと、子どもらしい正直な目、そして勇気ある行動で他者を助け、自分の身を救う。彼女は「無知さ」と「正直さ」という点で「子どもらしく」、「愚か」で勇気がある。しかし、アリスの場合、他の登場人物たちを理不尽に苦しめる「トランプの女王」に、「悪」の気配を感じてはいるものの、彼女の戦いは「世界を救う」ためにあるのではなく、自分が自分であるために繰り広げられている。その点で、「神話」や「単純昔話」の英雄像とは異なる新しい特性を持っている。

このように児童文学に代表されるファンタジーにおいては、英雄的行動を示す主人公は、「勇敢さ」「率直さ」「生真面目さ」「勤勉さ」「信心深さ」といった性格的特性がみられることが多いとされている。それは、主人公が「神話的」な英雄像から再創作されたことが原因であるというよりは、児童文学というジャンルが、子どもの心を「善きもの」へと導くことを目的としているからではないだろうか。そして、児童文学のその特徴は、社会の悪を根絶しようとする内容を含んでいる「英雄」伝説と共通要素を持っている。つまり、児童文学と英雄譚の語り特性が、「善と悪」の描き方という点で緩やかに一致していると考えられる。

別の例として、子ども向けの物語集である『グリム童話集』が挙げられるが、『グリム童話集』では、主人公の行動の善悪が話型と密接に関係している。グリム研究者の高橋義人は以下のように述べている。

ここで語られているのは明らかにキリスト教以前の民間信仰、人間は死んでから別人となって生まれ変わるが、前世の報いで、いい子は生まれ変わってから幸せになるのに対して、悪い子は不幸せになるという信仰がある。²⁴

²³ スミス前掲書、p.139。

²⁴ 高橋義人『グリム童話の世界—ヨーロッパ文化の深層へ』岩波新書、2006年、p.120。

このように、「子どものための物語」には、大人が持っている「子どもの精神の理想像」が投影されていることがわかる。『グリム童話集』に登場する「ホレお婆さん」という大地母神を元型とする女性の精霊は、働き者の女の子に金を与え、怠け者の女の子に汚れた泥を与えるが、これは子どもに「勤勉であること」「純真であること」を教育する側面を持っている。高橋は、日本の昔話の例として、「おむすびころりん」に登場する優しいおじいさんと、強欲なおじいさんの末路の違いも挙げているが、これは人間の性質や行動の「善悪」が、登場人物のその後の人生の結末に深く関わってくることを示している。「複合昔話」のジャンルに登場する「英雄」や、英雄的要素を内に秘めている子どもや動物たちは、善なるもの、あるいは神のために苦勞を厭わず、ふつうの人間が達成できないことを成し遂げていく。

III 英雄的行動とその心的動機の変化

3.1 「英雄」の元型とその特性

17世紀後半から18世紀にかけて、「子ども」の精神や教育に、道徳的観念や科学的視点が取り入れられるようになり、19世紀にはグリム兄弟の『童話集』が商業的成功を収めるようになる。「子どものための読み物」が増えることと、物語における「子ども」というモチーフ解釈の発展は、連動性を見せるようになる。

「童子神」というモチーフ分析を打ち出したスイスの精神科医カール・グスタフ・ユング Carl Gustav Jung は、個人的体験に由来しない「集合的無意識」を形成する「元型」について以下のように解説した。

元型という概念は集合的無意識の観念に必ずついてまわるものであるが、それは心の中にいくつもの特定の形式があることを示唆している。しかもそれらの形式はいつの時代にもどこにでも広く見出される。神話学ではその形式を「モチーフ」(モチーフ)と呼んでいる。²⁵

そして、ユングは英雄のモチーフを子どもの姿の神「童子神」と関連づけて、次のように論じた。

両方のタイプ(注・「童子神」とわかい「英雄」)に共通なのは、奇跡的な誕生と幼児期のさまざまな運命、すなわち捨てられることと、迫害者による危害である。神はまったくの超自然であり、英雄は人間的であるが超自然の一步手前にまで高められた存在(「半神」)である。神のほうは、とくに神を象徴する動物と密接な関係をもってい

²⁵ カール・グスタフ・ユング『元型論(増補改訂版)』(林道義訳)、紀伊國屋書店、2009年、pp.12-13。下線は論者による。

るばあいには、まだ人間的な存在へと統合されていない集合的な無意識を人格化しているのに対して、英雄のほうはその超自然的性格の中に人間の本質を含んでおり、それゆえ（「神的な」、すなわち人間化されていない）無意識と人間的意識との総合をあらわしている。したがって、英雄は全体性に近づきつつある個性化の潜在的な先取りを意味している。²⁶

前章で仮定した「英雄」の条件と、このユングの定義を比較すると、能力（条件3）と、出自（条件5）が重点的であるとされている。そして、無垢なる生まれたての「英雄」を「迫害する者」の存在、すなわち「悪」に焦点が絞られる。

捨て子、あるいは親がわからないという内容は、すなわち、英雄の誕生の「神秘性」を強調し²⁷、その孤独さ、唯一無二の存在であることを示している。また、その運命ゆえに、「強大な敵の前に無力に横たわり、抹殺される危険にたえずさらされている」²⁸という。ユングの論によると、その危機的状況を乗り越える超自然的な力を生まれながらに持つものこそが、「童子神」であり、幼き頃の「英雄」の姿である。彼らが後に戦う竜や魔物は、彼らの生存そのものを脅かす存在であり、それらの敵と戦うことは必然である。無垢なる赤子を殺害しようとするものは「悪」で、その運命を打ち破る「善」なるものとして、「英雄」の姿が浮かび上がる。

しかし、英雄譚の主人公たちは、かならずしも神々のように永遠の命を持っているわけではない。超自然的な力は、「不死」と直結するとは限らない。「英雄」は物語の中で傷つき、血を流し、死を目前にしながらも、この世を、この世に生きる者たちを根絶しようとする悪と戦う。「英雄」は神々に限りなく近い人間的な存在なのである。「英雄」と「神」を隔てる壁は、この不死性にある。「英雄」が「神」よりも人間にとって身近な存在であるのは、死すべき運命を共有しているからである。死を超越している「英雄」の精神的強靱さに、人間は憧れを抱かずにはいられない。

「神」と「英雄」の関係を「死」という条件で考えるならば、ここで思い出されるのは、「死すべき神」のモチーフである。人類学者であり民俗学者であったJ・G・フレイザーは『金枝篇』において、「死すべき運命にある神」とその伴侶である「不死の女神」との関係について言及しているが、「英雄」は、フレイザーの指摘する「不死の神」に対置される「死すべき存在」と類似性がある。女神アプロディテが、冥界の女王ペルセポネと取り合った結果、アドニス（アダム）は冥界と天界を行き来することになったが、俗世を「不死なる存在（神）」と橋渡しするのは、神に愛される「神でも人間でもない」特殊な存在だけである。「英雄」は「死すべき運命」にある「神的存在」であるために、英雄譚には英雄の死を悼む民衆の愛惜が込められているのだ。

「英雄」のモチーフは、戦いの中に死に至る可能性を強く有しており、人間を救済するために、その血が流されることが求められている。神と人間に愛される存在でありながら、失われる存在でもある。

²⁶ ユング前掲書、pp.189-190。

²⁷ ユング前掲書、pp.192-193。

²⁸ ユング前掲書、p.195。

「悪なる存在」と戦う「英雄」は、その戦いの目的から、「善」に位置づけられた存在である。「英雄」は生まれながらにして「善」であり、彼らの精神的葛藤は近代以前の物語においては、ほとんど描かれることはない。しかし、英雄の死を悼む人々や神の描写が、英雄譚に悲劇性という特性を含有させ、近代以降は、英雄の死に、英雄自身が抱く人間的苦悩が詳細に盛り込まれた物語が新たに創られるようになっていく。

3.2 「新しい神話」と新しい「英雄」像

近代以前の英雄譚には、英雄の人間的性格としての、葛藤や死への恐怖に関する描写が限りなく無いに等しいことがわかった。ワーグナーの楽劇『ローエングリン』(1850)では、主人公ローエングリンの人間的愛の葛藤が見られたが、「英雄」あるいは「ヒーロー」として戦う者の心理描写が克明になされるようになったのは、第二次世界大戦以降の事例が顕著である。近代以前、英雄が戦わなくてはならなかった「敵」とは、空想上の怪物であり、自然災害であり、小さな権力争いや土地争いにまつわる悪しき集団であったが、その後、人類は取り返しのつかない規模の大きな戦争を起こした。ユングは以下のように述べている。

独裁国家によって新たに人類にもたらされた恐怖は、われわれの遠いまた近い祖先が、かつて犯したあらゆる惨行の頂点をなすものにほかならない。ヨーロッパの歴史を覆う、キリスト教国民による数々の残虐と大量虐殺にはじまって、異郷の民族のもとの植民地建設が犯したところに対しても、ヨーロッパ人は責任を取らねばならない。この点に関しては、われわれの荷はきわめて重いのである。²⁹

そして、この逃げようもない現実を目の前に、われわれは「人はふつう、意識が自分自身について知っているところが、すなわち人間だと考えているから、自分が無垢な存在だと思ひ、そう思うことによって悪さに加えて愚かしさまで身につけることになった。」³⁰という。18世紀の終わりにヘーゲルが、ドイツという国の精神性をひとつにするために、新しい神話 *neue Mythologie* を持たねばならない³¹と言ったが、近代の学問としての神話学は、本来の道筋から一時外れてしまったと断じざるをえない。

17世紀に入り、近代初期になると、少なくとも子どもの教育には、「よい子は、孤独、自己鍛錬、敬虔、読み書き、勤勉などの楽しみを知り、清浄な回心体験を見だし、喜んでそれに専念するように期待されていた」という精神性が見出されるようになった。子どもの成長に道徳的意識が持ち込まれる³²ように変化が起きる。個人の喜び、悲しみ、葛藤、恐怖に目が向けられるようになった後の大戦であったため、第二次世界大戦以降の「英雄」

²⁹ カール・グスタフ・ユング『現在と未来』(松代洋一編訳)、平凡社、2001年、pp.271-272。以下、ユング前掲書Ⅱ、と表記する。

³⁰ ユング前掲書Ⅱ、p.272。

³¹ ヘーゲルが『ドイツ観念論の最古の体系計画』*Das älteste Systemprogramm des deutschen Idealismus* (1796? 1797?) において示した論。

³² アニタ・ショルシュ、北本正章訳『絵でよむ子どもの社会史 ヨーロッパとアメリカ・中世から近代へ』、新曜社、1992年、p.230。

像には、以前の神話的要素から史的要素が脱落したものが多々見られるようになる。物語においても、個の意識が高まりを見せる中、献身的な英雄像、神話的能力を秘めた英雄像に、大きな転換が起こる。そのひとつの例が、「ロボット」のモチーフである。

3.3 新しい「英雄」像と「ロボット」の物語の事例

漫画家・手塚治虫によって1951年に発表されたロボットの主人公「アトム」は、1952年から『鉄腕アトム』として連載された。シリーズ化された『鉄腕アトム』のうち、「地上最大のロボット」は、21世紀に浦沢直樹の手でリメイクされ、浦沢直樹・手塚治虫『PLUTO—鉄腕アトム「地上最大のロボット」より—』³³が発表された。この物語の舞台は、地球上のある国が舞台となっており、時代設定は「第39次中央アジア紛争」後とされている。

【登場人物】（世界最高水準のロボット7体とそれ以外のロボット）

① 主人公「ゲジヒト」

ドイツのデュッセルドルフでユーロ連邦の捜査官ロボットとして勤務。ホフマン博士が作り、特殊合金「ゼロニウム」の身体と、特殊火器「ゼロニウム弾」を持つ。

② 「アトム」

天馬博士によって、亡くなった息子・飛雄そっくりに作られる。天馬博士に捨てられた後、お茶の水博士によって保護される。

③ 「モンブラン」

前線で戦った後、スイスにおいて森林保護官になる。

④ 「ノース2号」

スコットランドで隠居中の音楽家ポール・ダンカンの執事となる。戦時中にたくさんのロボットを殺害したことによって悪夢を見るようになる。ピアノを習う。

⑤ 「ブラント」

戦後、格闘技の世界チャンピオンとして、ロボットの妻と5人の子どもと生活。

⑥ ヘラクレス

ブラントと同じく格闘技の世界チャンピオン。ブラントの親友。

⑦ 「エプシロン」

光子エネルギーを動力源とするロボット。唯一、平和維持軍の徴兵を拒否。戦後処理のため派遣され、その後多くの戦災孤児を引き取り育てる。

* 「プルートゥ」

アブラー博士によって作られた人間型ロボット。砂漠緑化のため研究を行っていたが、ペルシャが戦火にまみわれた後、7体のロボットへの復讐を命じられる。

* 「ブラウ1589」

ロボット史上、はじめて人間殺し（「親」殺し）を犯した。槍で貫かれ、ベルギーのブリュッセルで隔離されている。

これらの7体のロボットたちは、科学者たちによって、世界の平和の維持のために作ら

³³ 2003年～2009年にかけてマンガ雑誌『ビッグコミックオリジナル』に連載された。

れた。この世界において、水準の高いロボットは「人間とほぼ同じ感情」を持ち、人権を有し、外見も人間と変わらない。しかし、彼らは「人間を傷つけること」を決してしないプログラムがなされており、人間のように間違えたり、迷ったりすることはない。能力的にも道徳的にも人間を超える存在でありながら、人間を守るために働きつづける。その中で、人間が引き起こした世界戦争によって、ロボットは町を破壊し、同族（ロボット）殺しを強いられ、広域爆撃によって人間を傷つけてしまう。この戦いから生じたロボットの「精神的」葛藤が、プログラムに不具合を起こし、数々の事件を生み出していく。

これらのロボットの姿には、人間同士の諍いに巻き込まれ、自らの身を挺して戦うことを望まれた、これまでの「英雄」像と共通点がある。ロボットたちは、自分を生み出してくれた親である「人間」のために尽力し、本来は「永遠」ともいえるその寿命を全うすることなく、無理をして壊れてしまう。この物語において、すべてのロボットは、「敵」を殺害し、他者を傷つける自分のことを嫌悪する。人間の命令に従い、他者が望む形の「平和」を取り戻したという結果に満足せずに、「平和」の真実を希求する—それが未来の「ロボット」の姿であり、善なる心を持った者の葛藤である。

IV おわりに

「英雄」の存在意義が、「敵」を殲滅するためにあり、その「敵」が人間であるのならば、他の生命体であるのならば、地球そのものであるのならば、「英雄」は何にとつての「正義」を行使するのだろうか。「英雄」が「新しい神話」においても、その存在を「善なるもの」として「悪」と戦うならば、その個々の道徳心と目的が問われ続ける。

現代における「新しい神話」には、「英雄」の心的動機によって、その結果が左右されることとなる。ここで、英雄の条件を再び確認する。これまで人間は、この世のどこかにいるかもしれない「英雄」が世界を救うことを待ち望んでいた。現在は、科学技術の進歩とともに、人間の能力を超える存在を作り出し、そこに「善悪」の観念をインプットできるようにすなりつつある。少なくとも、英雄の条件1～5は人間の手によって作り出すことができるだろう。

しかし、19世紀に誕生した「新しい神話学」が、平和な世の中と、それを維持するための道徳を生み出すことができなかつたように、新しい「英雄」には、条件1～5以外のもが必要になる。英雄の6つ目の条件は、「英雄には禁忌、秘密があり、周囲の者がそれを破った場合、英雄は現世から離れる。」であった。この条件があらわすものは、英雄の能力は万能でない、ということである。「ある限られた条件のもとにおいてのみ、英雄の神的能力が発揮される」というこの内容は、神話世界のあるいはファンタジー世界の規則であり、物語を成立させる要件でもある。英雄の心的動機が、「善」に起因し、英雄を求める人民の要望が禁忌（タブー）に踏み込まないことが、現代における「新しい神話」、新しい「英雄」像の生成に欠かせないものとなるだろう。

参考文献

Brüder Grimm: *Deutsche Sagen*. Nachdruck der 1. Auflage 1816 und 1818. Hrsg. von Heinz Rölleke. Frankfurt a.M. 1994.

Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Nachdruck der 1. Auflage 1812. Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm. Hrsg. von Heinz Rölleke. Stuttgart. 2001.

Leander Petzoldt: *Deutsche Volkssagen*. München 1970.

Leander Petzoldt: *Kleines Lexikon der Dämonen und Elementargeister*. München 1995.

Jacob Grimm: *Deutsche Mythologie*. Wiesbaden. 2007

Richard Beitzl: *Untersuchungen zur Mythologie des Kindes*. Nachdruck der 1. Auflage 1933. Hrsg. von Bernd Rieken und Michael Simon. Waxmann, Münster 2007.

Wilhelm Grimm: *Über das Wesen der Märchen. Kleinere Schriften von Wilhelm Grimm*. Hrsg. von Gustav Hinrichs. Dümmlers Verlagsbuchhandlung. Berlin. 1881. S. 339f.

飯島吉晴：『子供の民俗学-子供はどこから来たのか』新曜社、1994年

浦沢直樹・手塚治虫『PLUTO 一鉄腕アトム「地上最大のロボット」より一』小学館、2003年

大林太良、伊藤清司、吉田敦彦、松村一男：『世界神話事典』角川学芸出版、2005年

河合隼雄：『神話の心理学-現代人の生き方のヒント』大和書房、2006年

三光長治・高辻知義・三宅幸夫監修『ワグナー事典』東京書籍、2002年

高橋義人『グリム童話の世界-ヨーロッパ文化の深層へ』岩波新書、2006年

谷口幸男、福嶋正純、福居和彦『ヨーロッパの森から ドイツ民俗学誌』NHK ブックス、1986年

野口芳子：『グリム童話のメタファー -固定観念を覆す解釈-』勁草書房、2016年

スミス、リリアン・H.『児童文学論』（石井桃子・瀬田貞二・渡辺茂男共訳）、岩波現代文庫、2016年

トンプソン、スティス『民間説話—世界の昔話とその分類—』（荒木博之・石原綏代共訳）、八坂書房、2013年

ユング、カール・グスタフ『元型論（増補改訂版）』（林道義訳）、紀伊國屋書店、2009年

謝辞

本論文は、以下の研究費助成を受けたものです。

・住友生命保険相互会社：未来を強くする子育てプロジェクト「スミセイ女性研究者奨励賞」研究助成金（研究期間：2016年4月-2017年3月 代表者：植 朗子）

・神戸大学 国際文化学研究推進センター：共同研究プロジェクト助成金「近代〈神話学〉の発展と〈神話〉機能の展開」（研究期間：2016年4月-2017年3月 代表者：植 朗子）